

エルンスト・ベルトラムの  
『精神運動年鑑』に関する講演

松 尾 博 史

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第30巻第1号（抜刷）  
2010年9月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 30 No. 1 September 2010

# エルンスト・ベルトラムの 『精神運動年鑑』に関する講演

松 尾 博 史

## I. は じ め に

小論はエルンスト・ベルトラムが1912年にボンの文学史協会で行った講演『精神運動年鑑』を紹介しつつ、ゲオルゲ・クライスの発行した『精神運動年鑑』が当時の読者層、特にゲルマニスティックの分野でどのように受け止められていたのかを分析する。『精神運動年鑑』は1910年2月から11年11月にかけて3冊刊行されており、この講演は『年鑑』に関する最も初期の、まとまった論述である。講演当時ベルトラムは28歳、大学教授資格獲得を目指す、在野の文学評論家であった。ゲオルゲ・クライスに近い位置にはいたが、その一員ではなかった。そのためベルトラムの講演は一方でゲオルゲ・クライスの内実を伝えながら、他方ではゲオルゲ・クライスには属さない立場から、ゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスに敬意を抱いていた読者青年層に『精神運動年鑑』がどのように受容されたかを伝えるドキュメントとなっている。さらに、ベルトラムの『精神運動年鑑』講演は、後に「ボン文学史協会通信」の第8年第1冊として、ボンのフリードリヒ・コーエン社から1913年に刊行されており<sup>1)</sup>、この冊子には、ベルトラムの講演に続いて行われたハンス・バーレント (Hans Berendt) の対論 (Korreferat) と、講演会での討議 (Diskussion) が付されている。これらは、それぞれ4頁強、2頁弱と短いものであるが、そこには、当時のドイツ文学研究界一般が、『精神運動年鑑』およびゲオルゲ・クライスについてどのような見解をもっていたのかを読み取ることができる。

## Ⅱ. ベルトラムとゲオルゲ・クライス

### 1. エルンスト・ベルトラム

エルンスト・ベルトラム (Ernst Bertram) は商人の息子として1884年、エルバーフェルトに生まれた。ボン、ミュンヘン、ベルリンで学び、1907年にボン大学のリッツマン教授 (Berthold Litzmann) の下で『アドルベルト・シュティフターの小説における言語技法』により博士号を取得し、1919年にボン大学で大学教授資格を取得した。1922年から彼はケルンでドイツ語学・文学の教授を務め、教養市民層と学生たちに大きな影響を与えた。その理由として Christian Schwarz は三つのファクターを挙げている。

ベルトラムは第一次世界大戦に戦闘機のパイロットとして従軍したことにより、英雄主義を体現し、著作において喧伝し、同時に技術を冒険として体験することができた。厳格な形式を備えた抒情詩においてベルトラムは、結びつきを感じていたゲオルゲ・クライスの英雄的パトスを取り上げたが、唯美的・印象派的なユーゲントシュティールの要素は抑え、ゲルマン的箴言詩から影響を受けた〈運命を宣告する〉ような声調を採った。その主著『ニーチェ —— 神話の試み』(Nietzsche. Versuch einer Mythologie. Bondi: Berlin 1918) でベルトラムは神話を敷き写しにし、かつ新たな神話を創生する文学の一翼を担った。このような文学は、第一次世界大戦後

---

1) Bertram, Ernst: Das „Jahrbuch für die geistige Bewegung“. (Stefan George II). Mitteilung der Literaturhistorischen Gesellschaft Bonn. 8. Jahrgang 1913, Heft 1. Cohen: Bonn. この講演原稿は50年以上再刊されず、いわば幻の『精神運動年鑑』論であった。その後, Bertram, Ernst (Hrsg. v. Wuthenow, Ralph-Rainer): Dichtung als Zeugnis. Frühe Bonner Studien zur Literatur. Bouvier: Bonn 1967, S. 160-185. で再刊され、さらに一部が Wuthenow, Ralph-Rainer (Hrsg.): Stefan George in seiner Zeit. Dokumente zur Wirkungsgeschichte Band 1. Klett-Cotta: Stuttgart 1980. に採録された。本稿はCohen版の初版をテキストとする。ベルトラムは同「通信」第3年第2冊として講演原稿「シュテファン・ゲオルゲについて Über Stefan George」を刊行しているため、『精神運動年鑑』に関する講演には「シュテファン・ゲオルゲⅡ」という副題がつけられている。

にオスワルド・シュペングラー、ルートヴィヒ・クラークス、ハンス・ブリュアー、アルフレート・ローゼンベルクが代表したものだが、当時の読書市民層の気分と世界の意味づけへの欲求を特徴的にあらわしている。ベルトラムはその著作によって、哲学者を英雄主義の予言者へと解釈し直すことに貢献し、ナチスの民族イデオロギーの思想的構成要素を作り出した。同時に彼は、講演者、随筆家として記念碑的な文体の散文を駆使し、ドイツの青年たちに犠牲的奉仕を要請したのであった<sup>2)</sup>。

ベルトラムは既に1922年に「ラインラントの北方的魂」を宣伝し、「血と土の文学」を要請した。ナチズムによる焚書を支持したが、その一方で友人であるトーマス・マンとフリードリッヒ・グンドルフの著作の破棄は阻もうとした。ゲオルゲ的な意味で、芸術と学問を統一したものとみなす文学研究者であった彼は、民族主義的思想のゆえに、ドイツ文学の展開をゲルマン的なものとロマン的なものの恒常的な闘争という枠付けで解釈していた。イデオロギー的にはゲオルゲ・クライスのエリート主義と「本質洞察 Wesensschau」から、ナチス第三帝国の理念に基づく非合理主義へと展開して行き、ヒトラーによる政権奪取を「アジアに対する第二の偉大なるタンネンベルクの戦い」として歓迎した<sup>3)</sup>。

1946年に公職追放。1957年、ケルン没。

## 2. ゲオルゲ・クライスとの関係

前述したベルトラムの主著、『ニーチェ——神話の試み』はベルリンのボンディ社から鉤十字をあしらった「芸術草紙」の紋章を刻印した表紙で1918年に出版されている。これはゲオルゲ・クライスの中で当時最もゲオルゲに近い

---

2) Killy, Walther (Hrsg.): Literaturlexikon. Autoren und Werke deutscher Sprache. Digigale Bibliothek Band 9, Bertelsmann/Directmedia: Berlin 1998. S. 1742 ff.

3) Ebd.

位置を占めていたフリードリヒ・グンドルフの主著『ゲーテ』(Goethe. Bondi : Berlin 1916)に続く二冊目の「芸術草紙」の紋章を刻印した表紙による著作の刊行であった。これだけを見ればベルトラムをゲオルゲ・クライスの一員と見ることは当然と思われるかもしれない。しかし、ベルトラムとゲオルゲの関係はそう簡単には片付けられない。

ベルトラムとゲオルゲとの接点となったのは、ゲオルゲのいここであったザラディン・シュミット (Saladin Schmitt, 1883–1951) だった。1906年にベルトラムと知り合ったシュミットは、1909年1月にベルトラムのいくつかの詩をゲオルゲに送った<sup>4)</sup>。ゲオルゲはその当時既に、ベルトラムが1908年2月にボンの文学史協会で行った講演「シュテファン・ゲオルゲについて」を知っており、高く評価していた。

ベルトラムがゲオルゲと初めて会ったのは1909年3月のことだった。そのときのゲオルゲの印象をベルトラムは *brutal* と記し、後に *Insel* に発表した詩「巨匠の肖像」*Bildnis eines Meisters* にまとめている。

細く、ただ支配するときのみ開く両の眼は、  
 その裏でまるで蠟燭に照らされているかのよう  
 何らかのいにしえの残酷さによって  
 頬には苦痛が埋め込まれている。  
 まるで公爵家の露台のように  
 暗い髪から顎まで急角度で墜ち込む  
 面貌、それは沈黙であり  
 威力に満ち、憎悪においては殺人的であった。  
 引き締まった唇の周りには  
 打ち碎かれた誘惑の痕跡、

4) Jappe, Hajo : Ernst Bertram. Gelehrter, Lehrer und Dichter. Bouvier : Bonn 1969, S.311.

そして撰び抜かれた宝石のごとく真摯に  
額は高貴な呪いを掲げていた。

1910年2月に発刊された『芸術草紙』第9号には、「若い世代の詩人たち」という枠で、ベルトラムの連作詩「オルフェウス」が著者名抜きで掲載されている。しかしそのことをベルトラムは喜ばなかった。1910年2月にベルトラムはゲオルゲと再会しているが、その時の印象もネガティブなものだった<sup>5)</sup>

1910年10月、『精神運動年鑑』編集者であったグンドルフ宛の書簡で、ベルトラムは「芸術家の形姿 Die Gestalt des Künstlers」に関する論文について言及している。ベルトラムはこの論文で芸術性の諸段階を浮き彫りにし、各段階を代表するタイプを透けて見させようと意図し、論文全体としては芸術的精神の占星学となるだろうと説明している。「グンドルフが望んでいるようにこの論文が『精神運動年鑑』の新巻に合うかどうかは、やがて明らかになるに違いない。」興味深い書簡だが、結局ベルトラムの論文は『精神運動年鑑』に載ることはなかった<sup>6)</sup>

その後、ゲオルゲはベルトラムの詩「ジビュレ Sibylle」を『芸術草紙』第10巻(1914年11月)にふたたび匿名で採用した<sup>7)</sup>

『精神運動年鑑』についての講演はこの間、1912年に行われたものである。講演の主催者であるボン文学史協会会長のリッツマン教授は、ベルトラムの博士論文指導教授でもあった。ベルトラムは、当時ドイツ文学研究界のいわば外様であったゲオルゲ・クライスの機関誌について、ドイツ文学の専門研究者達および自らの恩師に向かって語るという、難しい立場におかれていたというこ

---

5) Cf. Raschel, Heinz : Das Nietzsche-Bild im George-Kreis. Gruyter : Berlin/New York 1984, S. 153 ff.

6) Cf. Helbing, Lothar u. Bock, Claus Victor (Hrsg.) : Stefan George. Dokumente seiner Wirkung. Aus dem Friedrich Gundolf Archiv der Universität London. Castrum Peregrini : Amsterdam 1974, S. 15.

7) Winkler, Michael : George-Kreis. Sammlung Metzler Band 110. Metzler : Stuttgart 1972, S. 80.

とも、この講演の読解に際しては意識しておくべきだろう。

### Ⅲ. ベルトラムの『精神運動年鑑』講演

#### 1. 時代批判と『精神運動年鑑』

講演は、「悲惨が集まるところ、そこに神の家への階段がある」というエピグラムによって始められる。このエピグラムに導かれるように、まずベルトラムは、その当時盛んに行われていた時代批判の潮流一般について語り始める。

当時の時代批判で槍玉に挙げられていたのは、「行き過ぎた知性主義」、「全てを席卷する進歩主義の機械化」、「理性主義」、「実践的懷疑」、「プラグマティズム」、「精神世界のアメリカ化」である。そのような批判に共通しているのは「否定」であり、絶望的な抗議、良心の表明である。知性主義への反発は、そのような時代批判に「致命的に目を眩ます認識の松明からの逃走という性格」(S.4)を与え、「知性の(中略)拒絶」、「認識の血の通わぬ権力に対するグロテスクなまでに戦慄的な呪詛」(同)をもたらした。その代表としてベルトラムはニーチェの名を挙げる。

しかし「この呪詛のおそらく最終的な悲劇性は、この呪詛そのものがその最奥部の基盤において知性的な性格を持っていたことにある。かくしてこれらの時代の敵対者が全てまさにこの時代の武器、すなわちそこから力が湧き出るのは、そしてそこからのみ勝利の確信がおとずれるはずの中心を持たない手段でもって戦うという、注目すべき見物<sup>みもの</sup>が展開されたのであった。かれらの攻撃そのものが再びかの希望なき破壊、彼らが止めようとし、もっと実り豊かなものにしようと信じていた破壊の、煌く一形式に堕してしまうのである。これはニーチェが屈服した悲劇的呪いの写し絵である。」すなわち、認識への呪詛そのものが知性的な性格を持っていたために、認識のもたらす破壊への攻撃が破壊の一形式に堕してしまっていたところに、ベルトラムは当時の時代批判一般の悲劇性ないし矛盾を読み取っている。

このような時代批判の根本感情の源を、ベルトラムは1850年代から60年代

のショーペンハウアーに代表されるヨーロッパ悲観主義に見出す。悲観主義は「解体それ自体の悲嘆というよりは、いまだ過渡期の予言的予感」だったが、それはエピソードの嘆きとなる。「われわれの時代は崇高な文学も、偉大なる音楽も、真の哲学も、本当に生き生きとしたものは何も生み出さなかった。この時代の詩人はほとんどが模作者であり、音楽家は翻案家、思想家はディレクタント、処世家は俗物かボヘミアンにすぎない。今日ほど人間が上っ面だけで生きている時代はない。」(Hermann Graf Keyserling, 『悪しき教育家としてのショーペンハウアー』1910年) 一方では絶え間のない目的意識と物質への渴望があり、他方ではそのような目的意識の桎梏からの解放の願い、物質では求められない幸福への憧憬がある。しかしその願望や憧憬も無力であることを人々は知っている。「仕事自体はもはや生の一機能でも、肉体と魂の自然力への適応でもなく、はるかに生活目的のための奇異な機能であり、肉体と魂の機械への適応である。(中略) 機械化は合目的性の上に築かれている。機械化にとってはどんな行動も対象も自己目的ではない。どの器官も全体の過程に奉仕し、全体の過程は新たな器官を生み出すために奉仕する。どの瞬間も、それだけを取り出してみれば、無価値であるが、一連の無価値な瞬間を永遠へと先延ばしするという熱烈な仕事に満たされている。」(Walther Rathenau, 『時代批判のために』1912年)

この不毛性、無力感が時代の根本的な雰囲気であるとベルトラムは言う。「押しとどまること、転換、新たな目標は、単なる否定からは生まれてこない。〈発展〉も破壊も、精神に見捨てられた哀れなく進歩ですら、理性のはたらき *raisonnement*, 洞察 *Einsicht*, 審美的要求 *ästhetische Forderung*, 偉大なる伝統との再結合によっても、わずかに減速することすらできない。」(S.6)

## 2. ゲオルゲ像

『精神運動年鑑』はそのような閉塞状況の中から立ち上がった、とベルトラムは語る。「ここで行われているのは——決定的な違いを先取りして言えば



——非理性的なものへの知性的な逃亡ではない。この小さな共同体の内部では感性の確かさが、ありうる一定の革新への明確で内的な確信が、それによってかつて世界が唯一新生した、偉大なる人間の血と精神からの変容 *Verwandlung aus dem Blut und dem Geist (...) des Großen Menschen* が生きている。」(同) その「偉大なる人間」とは詩人ゲオルゲであり、この卓越した人物によってまとめあげられた集合的精神が『年鑑』を支配している。家柄も意志のありかたもそれぞれ異なる若者たちが、ゲオルゲという「創造的人間」の体験を唯一の共通点として結び合い、ゲオルゲの媒体として語っているのが『精神運動年鑑』であり、「この『年鑑』はこの桁外れの男の可視化の新しい位相に他ならない。」(S.7)

4年前に同じ会でゲオルゲについての講演を行ったことを理由に、ベルトラムはゲオルゲの人物像についてふたたび語ることは避け、そのかわりに二人の論者のゲオルゲ像を紹介している。

ひとつめは宇宙論サークル時代にゲオルゲの盟友であり、後に敵対することになったルートヴィヒ・クラークスの『シュテファン・ゲオルゲ論』(1902)からの一節である。クラークスによればゲオルゲは「その存在を厳格極まりない圧倒的な線で描き出す、(中略) 自らに対する絶対的な忠実さによって完成した卓越した人物」である。ゲオルゲは「その精神的輪郭が人間の魂の永遠なる根本的方向を単純極まりない線で描き出すかの人々の列に歩みを進め、今在るものに対して、精励するものがそれでもって自らを測り、自らの状態を正すことのできる新しい尺度を打ち立てた」とされる。

もうひとつは『精神運動年鑑』の編集者のひとりであり、ゲオルゲ・クライスの若手の核となっていたフリードリヒ・グンドルフの「ゲオルゲ像」(『年鑑』第1巻)の一節である。

この時代の表面的な傾向およびただ単に時事的なものに対する闘争を、演説ではなく作品によって、否定ではなく制作によって、これほど広範にか

つ決然と戦ってきたものはシュテファン・ゲオルゲ以外にいない。この時代のさまざまな傾向に対して彼は嘆きや嫌悪、さまざまな提案ではなく、新たな形成物 *eine neue Gestalt*, 創造的パトス *ein schöpferisches Pathos* を対置し、それが彼をもはや避けることのできない精神をめぐる闘い *Geisterkrieg* における指導者 *Führer* とした。ゲーテと浪漫派の時代以来はじめて魂を震撼させ、激励し、陶醉させ、魅惑した（それだけなら多くの詩人が成し遂げた）のみならず、その言葉と信念と愛の力によってのみ、魂を完全に創りかえつつひとつの精神的一派を、新しい雰囲気と、新しい水準を創造し、継続的に創造し続けている最初のドイツ人である。かれは共感と反感、賛嘆と揶揄を超えて、情熱を呼び覚まし、彼に関わる者は、いたるところで世間一般的なるものと衝突し、単なる個人的なるものを超えた詩人の本質と意志の象徴性に支えられるのである。

容赦なく自らに要求をかけつつ、ゲオルゲは自らの神、自らの素材と自己と、些細なことでも大いなることでも妥協することなく、鉄の専門性と巨人的労役の忠実さに献身しつつ戦う。演説ではなく形象 *Gebild* によって、魂を喪失した世界に生命を吹き込み、誤用された言葉を再び大いなる氣息と永遠の息吹によって満たすために。(中略) 脇目も振らず、自我崇拜と自己陶醉に付き物の何らかの甘い見方に陥ることもなく、預言者的能力と使命感とその視力の現実性に関する智のみによって堅持し (中略)、繊細に深く共振する、嘆くこともなく確固とした賢明な人間性によって震撼され、沈静化され、その作品そのものと、騒乱や混乱に対するその確信に満ちて人を創りかえる力の勝利によって報いを得る。この力の感覚は、詩行の形成から新しい青年たちの形成にまで至っている。かくして彼は、(中略) 年を追うごとに明確に発見者、指導者として運命の中に立つ。(S. 7 f.)

ゲオルゲの同世代であり、講演当時は敵対していたクラーゲスト、自分と同

世代<sup>8)</sup>であり、ゲオルゲ信奉者の中心であるグンドルフのゲオルゲ論を引用することによって、ベルトラムはある種、平衡の取れたゲオルゲ像を提示しようとしたのであろう。この二つのゲオルゲ論に共通しているのは、自己のあり方について妥協を許さない厳しい姿勢、個人的なものを超えて本質的なもの、根本的なものに到達していること、それによってひとが自らを測ることのできる、新しい尺度、水準をうちたてたこと、の三点である。また、グンドルフのゲオルゲ像を通して、ベルトラムは、それまでの時代批判者と違い、ゲオルゲは「否定ではなく制作によって」時代と闘ってきたということを改めて強調している。時代のさまざまな傾向に対して「新たな形成物、創造的パトス」を対置したことにより、ゲオルゲは「精神をめぐる闘いにおける指導者」となるとされる。「この発見者の使命 *die Sendung des Finders*, この支配者の統率力 *die Führerschaft dieses Herrschers* を証明することに、『精神運動年鑑』の青年たちは強い意欲を感じている。」(S.8)

### 3. 指導者

この二つのゲオルゲ像を通してベルトラムが提示するのは、指導者、教育者としてのゲオルゲと、ゲオルゲに指導される者たちの集合体としてのゲオルゲ・クライスである。『『精神運動年鑑』はその指導者の高い教育的野心、ニーチェ（もっともその本質と影響においてニーチェの野心とは大いに異なるのではあるが）以来最高の野心、模範による教育学であり同時に生きた人育てでもある大いなるソクラテ斯的意志を明白に示している。」(S.9) このような教育的意志はゲオルゲの作品に以前から潜在していたが、それが『第七輪』において顕著となり、ゲオルゲの作品は審美的芸術作品というよりはむしろ教育のための二次的媒体となったとベルトラムは主張する。「今やゲオルゲの作品は最

8) クラーゲスは1872年生まれで、ゲオルゲよりも4歳若く、当時40歳、ベルトラムよりも一世代年上だった。1880年生まれのグンドルフはベルトラムより4歳年上、当時32歳だった。

高の意味で芸術的意志と感覚以上のものの二次的表現としてほぼ現れている。最終的理解においては教育者 Bildner であり創造者 Schöpfer であるゲオルゲを前にした高度な偶然性として現れている。」(S. 9)『精神運動年鑑』に集う論者たちは、詩人ゲオルゲの詩作品が包含していた思想的端緒を、評論という形で明確化し、教育的影響力を強化することを目標とする。そこでは、詩そのものの審美的解釈はもはや問題とならない。「ゲオルゲという寡黙な人物をめぐるお喋りは、無言の、形象の中に閉じ込められていた内容が声を得、思想的な位相に歩み出るやいなや、雲散霧消しなければならない。(中略) 今や詩の意味がみずから語りだすのであり、それと戦ったり、拒否することは出来ようが、それを否定したり誤解することは出来なくなる。」という、グンドルフの「ゲオルゲ像」(『年鑑』第1号)を引用して、ベルトラムは断言する「従って、『年鑑』が示すのはむしろ詩人——詩人としては結局のところ〈仲介する〉ことは出来ない——ではなく、偉大なる裁断者 Richtender ないし建立者 Aufrichtender である。」(S. 9)

#### 4. 現代社会・学問・芸術・音楽批判

ゲオルゲは時代をもはや、闘争すべき敵対手として批判するのではなく、「虚無」と宣告する。しかし進歩の果てに終末、滅亡しか展望することのできなかった前世紀の「悲観主義者」達と異なり、『精神運動年鑑』はこの世紀のうちにも転換、変革を期待する。そして軽蔑に満ちた敵意とともに、現代社会を容赦なく裁断する。

ヴァレンティン「進歩の批判のために」(第1巻)、グンドルフ「本質と関係」(第2巻)、ヴァレンティン「出版界と劇場の批判のために」(第2巻)、カーラー「劇場と時代精神」(第3巻)などの評論を挙げつつベルトラムは、ゲオルゲ・クライスが進歩にともなう破壊の特徴と指摘したものを要約する。それは「生命をもつ総合的な存在の器官が独立してしまうこと、本質が諸関係に解体してしまうこと、手段が無意味な自己目的と化すこと」(S. 10)である。あら

ゆる位相で本来は道具であったものがそれ自体価値あるものとされ、「手段」が「目的」へと変化する。人間が活動するあらゆる領域で「機械が支配し、道具がその主人に苦役を課し」、手段の支配の下、人間が手段に極端に隷属してしまっている。その典型を交通に見出したグンドルフの「本質と関係」(第2巻)を、ベルトラムは引用している。交通は「今では現代人の不可侵の理念を意味するほどに、手段から目的へと変化した。もはや正当化するのが不必要なほど最終的かつ決定的なものとなっている。ほんの少しでも交通を制限する恐れのある措置は、狂気ないし犯罪と見なされ、今日の交通を破壊したり交通よりも重要でありえるような資材が何かあるかもしれないなどとあえて問うものは誰もいない。最終的に、ベルリンからハンプルクに行くのに前より2時間早く着くとして、それが何を達成したことになるのか、考える者はいないのである。(中略) 高速化それ自体を生産的な達成だと驚嘆することによって、麻痺した創造の埋め合わせをしているのである。」(S. 10)

ゲオルゲ・クライスの批判は、当時の学問や芸術のあり方にも及ぶ。「意識自体がこの脱中心化 *Dezentralisation* に屈し、その道具の道具に墮している。」(S. 11) そのため、「知識のための知識の堆積が自立した理想とみなされている。」そのような「学問」にはもはや人間を形成する力がない。また、「芸術においてもわれわれが見るのはまさにこの〈操作のための練り上げた媒体の操作〉であり、今日の〈戯曲は、生を劇的に把握する衝迫のために創られるのではなく、劇場があるから作られるのである。〉(S. 11, グンドルフ「本質と関係」『年鑑』第2巻より。)」

また、ゲオルゲ・クライスの精神的姿勢に特徴的なのは、その音楽に対するあり方だとベルトラムは指摘する。「ゲオルゲ的精神は最初から高度な意味で反音楽的だった。」(S. 12) ゲオルゲ・クライスの音楽観はヴォルフスケールの論文「音楽の精神について」(『年鑑』第3巻)に見ることができる。ヴォルフスケールによると、「音楽においてそれぞれの時代は歌う。音楽は全て白鳥の歌である。」

音楽は混沌への志向、反精神、〈没落の前兆 prodigum, 兆候 Vorzeichen〉とみなされる。したがって音楽史は〈ヨーロッパの魂の退廃 Seelenentartung の歴史、(中略) 信仰の喪失、悲劇的品位のない没落遊戯、倨傲と自己破壊の最後の舞踏曲〉になる。〈どのような構造も、腐敗しつつ、音楽へと変容し、かつてあったものが帰還するごとく亡霊のように音楽として回帰する。〉それゆえに音楽は、現代人にとって唯一、内的にいまだに相応しい、運命的に親和性のある芸術なのである。〈あの最後の偉大なる音楽家の作品において古いヨーロッパが最後にざわめきを上げ、身に受けることのできる最後の震撼を経験したとしても、誰がそれを訝しむであろうか？ ワグナーの作品は(中略) 古くからの音楽原理からの離反ではなく、その最奥の内実の真実この上ない最後の現象形態である。古代の没落の後、キリスト教ヨーロッパが常にそこから糧を得、自己形成していた全ての生の潮流は、ワグナーの作品において統合し、(中略) かつて在りしものの全ての香気に満ちた泡立ち、海の光、沈んでしまった財宝の輝きは、ワグナーの作品の免れることのできない大音響の(中略) 自己消尽へと引き攢うような魔力をもたらすのである。〉音楽の終わりがそこにある。〈なぜなら、われわれの希望が真実となり、新しい生が自らを認識し、新しい国が実現するのであれば、退廃は終末を迎え、それとともに音楽の支配も終末を迎えるからだ。〉(S. 12 f. なお、〈 〉部分はヴォルフスケールからの引用部分。(中略) もベルトラムによる原文のまま)

音楽は反形式の象徴であり、ワグナーの音楽とともにヨーロッパは没落する一方、ゲオルゲ・クライスの求める新生、新しい国への転換が生じるならば、音楽はもはや芸術における支配的な地位を失うというのが、ヴォルフスケールの論文を通してベルトラムが特徴づけるゲオルゲ・クライスの音楽観である。

## 5. 「偉大なる人間」の体験

それでは、ゲオルゲ・クライスはどこに革新への希望を見出そうとしたのであろうか。それは、「偉大なる人間」を「根源的に体験」することとされる。「真の創造的な更新は——それが表れたとたんに反作用として作用することがあるにせよ——混乱への単なる反作用からは生まれず、根源的な体験から生まれる。」（グンドルフ『シェイクスピアとドイツ精神』）「偉大なる人間の〈原初的体験〉、これだけが本質的に必要なことであり、本質的な〈問題〉であり、時代の本質的希望である。」（S. 14）それは、「偉大なる人間こそが、神的なものを体験できる最高の形式だからである。」（グンドルフ「模範」、『年鑑』第3巻）したがって、偉大なる人間への崇拝は、宗教的な性格を帯びる。

宗教的崇拝の対象となるのは歴史上の人物にとどまらない。むしろ現代の問題に関する問いに答えを求めるためには、今現在生きている偉大なる人物の声が必要とされる。

ベルトラムはこの「偉大なる人間」に対する宗教的崇拝 *Verehrung* は、個人崇拝 *Personenkult* や個人賛美 *Persönlichkeitsverherrlichung* と混同されてはならないという。偉大なる人間は、その独創性よりは、むしろ「非個人性」によって際立つ。その区別は、グンドルフを引用しつつ、二項対立によって示される。本質－独創、挑戦者－変種、宗教的天才－山師、行為者－政治屋、詩人－文士、英雄－冒険家、偉大なる者－目を引く者。「個性とか個人とかがもはや通用しない中心へ、その本質の根を深く下ろす者だけが」精神力の担い手となりうる。そしてそのような「偉大なる人間」に接したものは、その体験を通して自ら変容する。「偉大さとは要求であり、尺度であり、中心である。その核心で自らを形成し直す者だけが、偉大なる者に近づくことを許される。」（S. 14, グンドルフ「模範」、『年鑑』第3巻）

「変容する人間——かれのみが真に精神の永遠に変容可能な、永遠に更新される力を証するのであり、かれのみが創造的精神 *Genius* である。変容、心を創り変えること、意志を新しくすること——これのみが、唯一偉大さを認め

ることが出来る後世に示せるかれの正統性である。偉大なる絶対的な心臓部の生ける核心から出発し、つねに先の層と凝縮された圏に摑みかかりながら変容すること。」以上のように、ベルトラムによれば、変容可能であることが「偉大なる人間」の要件である。それではいかなる方向への変容が目指されるのであろうか。それをベルトラムは「理性的なものからの自由 *Befreiung vom Rationalen*, 機械への奉仕および科学万能観からの自由, 目標一点張りからの解放, 非形而上的現存在の呪いからの自由である」と述べ、さらにヴォルタースの「要綱」*Richtlinien* (『年鑑』第1号) から次の文を引用する。「言葉が肉となると、新世界が形成される。」(S. 15)

## 6. 指導者願望と葛藤

こうしてベルトラムは非合理主義、反技術・反科学主義へと接近する。ヴォルタースの「要綱」の引用に続いて、ベルトラムは記す。「いつか、ひとりの支配する人間、王者の意志がわれわれとともに生きるようになるとき、言葉はもういちど大地を変容させるであろう。王者のみがもう一度われわれ人間を共同体へと力づくで結集し、この共同体は新しいもの、未知のままに希求されたものの大地であり種となりうる。新しい人間性——望むべきものはこれである。新しい人間性は、新しい人間への憧憬からのみ生まれてくる。われわれのなかにそのような者が具現しているであろうか？ その者は、十分に支配者的であり、いやおうなしに人を惹きつけてやまないであろうか？」(S. 15) 講演の昂揚感の中、ベルトラムはゲオルゲ・クライスの指導者願望、支配者待望とほとんど自己同一化しようとするかのように思える。そして、その昂揚感のままに、ベルトラムはヴォルタースの『支配と奉仕』から、『生の絨毯』について論じた一節を引用する。

病める時代の毒によってその心をいまだ食い破られていないものは、ここでは数多くの目標をすでに踏破した人間への憧憬が、困難な闘いを繰り広



げながら大いなる目標を定めていることを感じるにちがいない。自ら最深の疑念に苦しんできた仕事の堅実さが創造の神聖な義務 göttlicher Zwang を証していることを。ここでは、精神の諸国で最深の郷愁に苦しんだことのある愛郷者が、その支配領域の辺境を巡っていることを。ここでは、罪と礼、美と美ならざるもの、品位と卑俗の判断がなされ、その判断はその基準を偉大なる生の絶対性から、その要求を真実この上ない正義、すなわち気高い魂の唯一性から引き出していることを。この魂はその時代のどのような価値にも増して優れ、市場とは疎遠であり、もっとも高貴な者たちにとっては導き手である。この魂は自らを最高の師範たちのみに即して測り、認識した孤独という担い難い苦悩を、自我、神的なるもの、天使を永遠の中に探すことによつてのみ和らげる。(S. 15 f)

ヴォルタースのレトリックによれば、詩集『生の絨毯』においてゲオルゲが定めた「大いなる目標」を感じ取れない者は、既に時代の病に毒されていることになる。また、それが感じ取れなければ、その者は「偉大なる生の絶対性」、「真実この上ない正義」からも疎外され、「もっとも高貴なる者たち」の一員ではないことになる。最上級や大仰な形容詞、名詞を羅列しつつ、一方的な価値付与によって、ヴォルタースは読者にゲオルゲ信奉を強いるのである<sup>9)</sup>。

ヴォルタースの文体とレトリックには、この一節を引用したベルトラムも距離を置こうとする。引用部に続けてはこうある。「われわれはこのような口調には馴染めなくなってしまった。厳かな旧来の信仰の死にゆく形式や、新しい救済のグロテスクなまたは〈科学的〉な試みに取り囲まれて、われわれは信じることを忘れていた。われわれは懷疑の生徒として成長し、おそらく熱狂の炎に憧れつつも、火炎の中に入っていくまで疑うのである。そしてこのような懐

9) ヴォルタースのレトリックについては、松尾博史「『支配と奉仕』——フリードリヒ・ヴォルタースにおけるゲオルゲ・クライスの自己解釈——」、『上智大学ドイツ文学論集』第38号、2001年を参照。

疑をわれわれは恥じるにはあたらない。偽の救済者、藪鴟みの予言者、誰もその野心から解放できない解放者、これら創造的建設的意志の戯画ばかりがいる時代に、ある種の知的純粋さという原初的な権利以外のどんな権利をわれわれが持っているというのだろうか。精神の葡萄の北限よりも北方で生まれ、そこに故郷を持つわれわれは、〈プロテスタント〉の遺産、すなわち思想的陶冶、理性的良心、疑念をもって物事を見ること、ロマン的、〈カトリック的〉または〈ギリシア風〉の郷愁全てに対する、冷静で飾りっ気のない断念という遺産を守っていかなければならないのである。」(S. 16)

北方的—南方的、プロテスタント—カトリック、懷疑—信仰、といった二項対立に基づき<sup>10)</sup>、ベルトラムは後者に憧れつつも、前者の理性的良心、冷静な懷疑の立場に自分たちがあることを諦念とともに肯定する。しかしそれでも、心酔や崇拜に向かう心性をベルトラムは否定しきるのではない。「われわれはこのような緩慢な懷疑、この冷静なプロテスタント的聡明さを、だからといって精神的存在の最終的な意味ないし最終的価値にまで高めることはできないし、またそうしようともしていない。大いなる理想の犠牲者への熱狂、実りある陶醉、自己放棄的、狂信的跪拝が、人間の血に残る貴重な遺産であることを、われわれはすっかり忘れてしまいたくはないのである。」(S. 16) ベルトラムは、認識がともすれば認識それ自体のために行われ「誘惑的で冷酷な猥褻行為」に堕しかねないこと、分析が「辺りを嗅ぎまわる精神や心理主義」に陥りかねないことを指摘し、「燃え立つような〈認識の彼方〉を、即ち古い故郷を、行為とパトス、あらゆる種類の悲劇的情熱、悲劇的志操の神秘的母を」否定してしまうことを警告する。むしろ過剰な認識のもたらす猜疑が、偉大なる者に対して驚嘆する能力を奪ってしまい、「新しい宗教的な世界感情」に対してひとびとがもはや心を開くことができなければ、それこそが「この世紀のさ

10) この二項対立についてはとくに、ベルトラム「北方とドイツ浪漫主義——1925年コペンハーゲン大学に於ける講演」、同『獨逸の形姿』、外村完二訳、白水社、1942年、253-286頁を参照。

し迫る救いがたい点である」(S. 17)と言う。

しかしまた、真に偉大なる者を見逃してしまうのではないか、という「<sup>おそれ</sup>虞」が、「教養ある大衆 *die gebildeten Massen*」を不安定にしている、とベルトラムは指摘する。「というのはこの（虞という）本能は大衆を救いようもなく一瞬にして——まことに新しい見物なのだが——佻しい予言者たちや怪しい神の紛い物の虜にしまうのだ。」民衆の中には相反する二つの志向が同時に存在している。一方では、「健康そのものに慎重に生きている民衆の本能は、はじめはいつも新しいもの、疎遠なもの、大いなるものに対しては全て抵抗する。」ところが他方では、「市場はお祭り騒ぎの道化に満ち満ちていて——そして民衆は自分たちの偉人がご自慢だ。偉人たちは民衆にとって時代の主人なのだ。」この「偉人がわれわれの人生に必要」(ブルックハルト)という欲求は、偉大な人物を欠く空位の時には、どの時代にも増して激しくなる。「われわれの心の中の崇拜しようという力は、崇拜の対象よりもはるかに本質的」(ブルックハルト)だからである。民衆の中に潜在するこのような相反する二つの傾向と、それが偽予言者への狂信に雪崩をうって変化しかねない危うさを指摘した上で、ベルトラムはこの欲望を否定する。「しかし最終的には、偉大なる者を跪拝したいというこのような憧憬をとまなう、進んですぐに狂信に傾く趨向は、なんの意味もないものだ、というのは、このような趨向には偉大さについてのおぼろな本能のもつ確かさがまったく欠けているからだ。知性的であること、これはこのような崇拜の運命そのものである。崇拜とは欠陥の洞察、自らの貧しさからの逃走であるが、身を焼き尽くすような宗教的無意識の炬火ではない。そして〈最高でありうるのは愛であって、逃亡ではない。〉(グンドルフ「ゲオルゲ像」)」(S. 18) すなわち、偉大さを本能的に悟るからではなく、自らに欠けているものを洞察し、自らの貧しさを認識する知性ゆえに、そこから逃れるために崇拜の対象を求めることを理由に、ベルトラムはこのような崇拜を否定するのである。そして、まさに逆の理由を挙げることによって、彼は『精神運動年鑑』の可能性を認める。

このような堂々巡りの中で今日の人々は駆り立てられている。そしてわれわれをこの堂々巡りから引き離すことができるものがあるとすれば、それは新しい真の感動、驚嘆みにされること、血の永遠の熱の他にはない。そこにわれわれは『精神運動年鑑』のような証言 *Zeugnisse* の価値を感じる。この『年鑑』では、真の感動、本能、宗教的な結びつきと気高い従順さが自らを表明しているのである。ここには誰も、よき意志のもとで踏み入ることができ、期待することができる。ここでは昔日の地霊の焰がほのめいており、点火されることを求める者が現れるならば火炎を上げる用意があるのではないかと。(S. 18)

しかしここでふたたびベルトラムは、ワグナーの悪しき先例を想起する。「われわれはゲオルゲの野心でなくとも、危険は、パイロイトと称するのではないかと、ときおり恐れしたのであった。ワグナーの恐るべき野心、神話と音楽から、作品と芸術家の意志の新しい芸術的統一からの再生という彼の絢爛たる自惚れがいかなる影響を(また誰に対しての影響を)発散したかを見て以来、(中略)われわれは精神の非ドイツ的宮廷典礼に対して、聖杯騎士のあり方に対して、最高の救済の奇跡に対して、司祭が〈両手を大きく開く〉ことに対して、不審の念を抱くようになった。」(S. 18 f.) ワグナーにおいて見られたものは、「個人に対する絶対的な表敬」であるが、それはニーチェが『曙光』で語ったように、「憫笑すべきもの」とされる。それは自己満足的で影響力は大きいものの無価値な個人崇拜である。それをゲオルゲのあり方と混同してはならないとベルトラムは指摘する。ゲオルゲの「彫琢された拒絶というあの姿勢」 *jene Haltung stilisierter Abwehr* は、政治的な思惑などとは無縁の、真性の形式であり、「流行に乗った平板な半熱狂の殺到」を妨げる。そこにあるのは「絶対的で決して譲歩することのない品位、束縛されることのない純粹さ、冷たく明快で泰然とした厳格さ」(S. 20)であり、孤独である。ゲオルゲという強大な人物 *die gewaltige Menschlichkeit* をその強力な中心点 *der mächtige Mittelpunkt* と

して、ゲオルゲ・クライスは常に新しい作用の輪を繰り広げている。その影響ははっきりと外へは表れず、また盲目的な弟子たちが時に熱狂のあまりの「行き過ぎ」Übertreibungen を犯すことがあるとしても、ゲオルゲ・クライスと『精神運動年鑑』は深く地下的な作用を及ぼしている。

グンドルフの「歴史はいま生きているものと関わるものである」という言葉を用いつつ、ベルトラムは次のように述べる。「従って、この稀有な人物 dieser seltene Mensch の本質と道程を今の時点で分析し整理しようとすることは、ひとまずは思いとどまるべきだろう。」必要なのは分析や批判ではなくて驚嘆すること、そしてそこから生まれる影響であり、「生きてあるもののための決断」Entscheidung für das Lebendige（ヴォルタース：「要綱」、『精神運動年鑑』第1巻）であるとされる。「ここから何が生まれてくるのか、われわれは知ることはできない。（中略）しかし肝心なのはそもそも認識や野心への信仰ではなく、血への信仰 ein Glaube des Blutes が作用していることである。」（S. 21）エッケルマンとの対話篇からベルトラムはゲーテの「世界に貢献しうるのは途方もないものだけである」という言葉を引用し、「悲劇的志操」tragische Gesinnung がそこには息づいているとする。「全体的な決断」der ganze Hauptentscheid のための偉人の使命とはただ、「個人を超えたところで現れ出る意志を貫徹すること」（ブルックハルト）であり、ゲオルゲのような人物 ein Mann wie George は自分の使命をこのように捉えている。ゲオルゲの『第七輪』の箴言、

王にもまして他と一線を画す支配者の眼差しをもつ者が  
兄弟たちに出会い、そしてその仕事を糞土に貶めた——  
お前は誰だ、よそ人よ？—— 私はつつましい奴隷に過ぎませぬ  
朝焼けの中に来るべき人の。

および「恍惚」Entrückung の結句、

…わたしは聖なる炎のほのめきに過ぎぬ

聖なる声のどよめきに過ぎぬ。

をベルトラムは引用し、「聖なる炎の護り手」というゲオルゲの自己了解を明らかにする。すなわち、聖なるものの媒体、<sup>メディアウム</sup>預言者としての詩人像である。そこにあるのは「人間の最高の使命への謙虚さ」であり、「生の英雄的根本感覚 die heroische Grundempfindung des Lebens」である。それを前にしては、個人的な人間とか、そんな人間に捧げられうる哀れな崇拜 ein armseliger Kultus とかは何ほどのものであろう？ 彼の仕事、すなわち詩作品に対してゲオルゲは決してそのようなカルト的崇拜 solche kultische Verehrung を許しはしまい。というのは、詩作品ですらゲオルゲには〈聖なる声のどよめきに過ぎぬ〉からである。」(S. 22)

伝えるべき聖なるものを前にするならば、詩人その者は単なる媒体に過ぎない。従って、ワグナーに見られたような芸術家本人への崇拜や、それを求める倨傲は、ゲオルゲにおいては問題にならない、というのが、個人崇拜への危惧と指導者願望の葛藤のなかで、ベルトラムがゲオルゲについて下したとりあえずの判断である。そしてゲオルゲの詩が「偉大なる人間的作品にも解き難く留まる悲しむべき不完全さ」を免れているとすれば、その詩から、「最も疎遠な者ですら、これら新しい稀な創造世界を駆ける精神の炎の息吹を感じることであろう。それは情熱的なエロス、世界改新の神的衝動であり、その衝動は敬虔である、」ただし、それに続けてベルトラムは一言、牽制とも取れる言葉を付け加えないではない。『いかなる形態 Gestalt をその神 der Gott が取っているとしても。』すなわち、『第七輪』で示されたマキシミン神話に対しては、ベルトラムは賛同も批判もせず、距離をとっている。

この長い講演の最後にベルトラムが言及するのは、ゲオルゲの「半ドイツ性」Halbdeutschtum、ないし「非ドイツ性」Undeutschtum を非難する声への反論である。ベルトラムの観点からは、ゲオルゲは「ドイツ精神の良心の痛み」des

deutschen Geistes böses Gewissen とされる。そして、国境の内なる者のための最も激しく燃えさかる告知者 Verkünder, 護衛者 Verteidiger, 革新者 Erneuerer は常に境界線にいたということを、ゲオルゲをドイツ的ではないとして非難する者は想い起こすべきだとベルトラムは指摘する。境界に立つものは「運命の番人」Wächter des Schicksals であり「未来の門番」Torhüter der Zukunft である。「常に生そのものが最も炎のように愛され、最も灼熱的に讃えられ、最も熱烈に永遠化されるのは、その限界すれすれにおいてである。というのは、彼方に近いところ——深淵の間隙でのみ——途方もないものが育つからだ。」すなわち、講演の最後でベルトラムは、ゲオルゲの辺縁性を認めつつも、逆にそれをバネとしてゲオルゲをドイツへ回収し、ナショナリスティックな願望を負わせるのである。「彼らの生に、全てのことにもかかわらず、ドイツ精神が精神の永遠の運命に関わるだろう期待がかかっている。」しかしそのような願望ないし期待の所以をベルトラムは証明しようとはしない。ベルトラムは講演を次の言葉によって締めくくる。

それではここ、言葉の限界に達したところで、われわれは親方修行中の徒弟への徒弟修業証書の警句を忘れることのないようにしよう。〈言葉はよいものだが、最上のものではない。最上のものは言葉によっては明らかにならない。〉(S. 23)

この、最後の引用部は、序詩として講演文の冒頭に置かれたゲーテの詩「時のしるし」Zeichen der Zeit と照応する。

Hör' auf die Worte harum horum :  
Ex tenui Spes Saeculorum.  
Willst du die harum horum kennen,  
Jetzt werden sie dir sich selber nennen.

harum horum という言葉に耳を澄ませ  
些細なものから世紀の希望は来る。  
harum horum を知ろうとすれば、  
いまやそれらが君に自らを名のるのであろう。

ベルトラムは、この詩の第2行 *Ex tenui Spes Saeculorum* のみを序詩として講演の冒頭に掲げている。ラテン語の指示代名詞“hic”の女性形複数2格 *harum* と男性形複数2格 *horum* の響きに聴き入れ、そのようなかすかな言葉の響きに聴き入るとき、そこから希望が生まれてくる<sup>11)</sup> というゲーテの箴言は、言葉の微妙な響きに耳を澄ますこと、すなわち詩の響きに沈潜すれば、言葉がおのずからこの世界の秘密を告げてくれ、隠された希望を知ることができるかもしれないという教えを伝えている。しかしその秘密、希望は、言葉への沈潜によってみずから体験することはできるかもしれないが、その内実を、客観的な知識として、言葉によって他人に教示することはできない。ゲオルゲの詩のもたらす体験について、あるいはその体験に基づいて言論活動を行おうとしている『精神運動年鑑』の内実について、講演という言語行為によって接近することはついにできないという断念を表明することによって、ベルトラムは発表を終えるのである。

## IV. 対論および討議

### 1. ハンス・ペーレントによる対論

ベルトラムの講演に引き続いて行われた対論 *Korreferat* で、ハンス・ペーレントはまず、このような断念を含むベルトラムの姿勢そのものを批判的に問う。

『精神運動年鑑』が表現しているような、また真に偉大な人間なら誰でも具現しているような精神運動を理解しようとして対決するには、二つのやり方がある。ひとつのあり方は、観察者が最も内奥の共体験のなかで自分自身のうちに、その現象の本質をなす雰囲気や思考の筋道、意志の衝動 *Willensimpluse* を追創造することである。彼はいわばその現象の中に沈潜

11) cf: <http://www.wer-weiss-was.de/theme 46/article 2870476.html>



し、その中で生き、そこから語る。もしくは観察者がそのような現象の共同体験、沈潜の後に、ふたたび外から新しい形成物を観察し認識するために、ふたたびそこから自分自身に戻るというやり方がある。第一の観察のあり方は、第二のあり方の前提である。異なるものに接して、自らの本質を揚棄することなくしては、異なるものは決して完全には把握されえないのである。しかしながら、第二のやり方のみが正当 *gerecht* な把握に通じると同時に言ってもよいであろう。その現象の内容、本質、形式、限界についての意識的な明瞭さ、という意味で正当な把握に。先行した自己放棄 *die vorhergegangene Selbstentäußerung* は、全く異なる観点を持ち込むことによって把握すべき現象に暴力を振るってしまうような観察方法からの防護となりうる。この意味で、続く文章は先行した講演の補完として把握されうるかもしれない。先行した講演の『年鑑』クライスへの通暁 *Hineinleben* ぶりは、より穏やかで客観的で、ひょっとするとより冷静でもある観察という、二つ目の見方の前提を常に形成してくれよう。(S.23 f.)

ベーレントはベルトラムの行った講演が、ゲオルゲ・クライスの言説への沈潜、その再創造であり、共同体験を内部から主観的に語っているに過ぎないのに対して、自らの対論はそのような沈潜、共同体験を前提としながらも、そこらもういちど離れ、客観的、冷静な議論を行うがゆえに、より正当なものだとして、ベルトラムの講演の上位に立とうとするのである。

そのような「客観的」分析に基づき、ベーレントは『精神運動年鑑』は「ひとつの本質的核心の連作的展開 *zyklische Entfaltung eines Wesenskerns*」だと述べ、「第1巻は既に語るべき本質的なものを全て含んでおり、第2巻と第3巻はいわばこの本質的特徴の解説、応用、根拠付け、説明に過ぎない」と喝破する。『精神運動年鑑』を統べているのは有機体の原理であり、デュオニソスのなヴォルタースとアポロ的なグンドルフという二人の指導者においてもそれが如実に表れているとされる。すなわち『年鑑』第1巻で発表されたヴォルタ

ースの「要綱」の敷衍ないしそこで立てられた観点の応用に過ぎないのが第2巻の「形成物」Gestaltであり、第3巻の「人間と種族」Mensch und Gattungである。同じように、グンドルフは第1巻で発表した「ゲオルゲ像」Das Bild Georgesにおけるゲオルゲの本質の包括的な解明として第2巻で「本質と関係」Wesen und Beziehungを著し、さらにそれを補完するように、「本質」および「形成物」Gestaltの具体的な表れとして第3巻の「模範」Vorbilderにおいて古典ギリシア、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテについて論じている。「グンドルフとヴォルタースのそれぞれ3論文はいわば有機的原理に従ってそれぞれから成長し、葉と花のように特別な精神のあり方の違いにおいてそれぞれを補完し満たしているように思われる。『年鑑』のその他の全ての論文はこれらの指導的な思想の筋道に、補完するように、あるいはほとんど奉仕するようになりたいぐらいだが、従属している。」(S. 25)『年鑑』の中では、ひとりひとりの個人は全体に対する支配的あるいは奉仕の関係においてその意味と価値を得るのであり、その構成員は、個人でありたいとは意識していない、というのがベーレントの見解である。

ゲオルゲ・クライスは「世界から引き籠ってしまった者の隔離状態に留まろうとはせず」、「形成しつつ時代を作り変えようとしている」Gestaltend soll er die Zeit umgestalten. そこにこのクライスの男性的で、好戦的で、影響力を振るうことを喜びとする要素がある。しかしその一方でクライスは、師 Meisterであるゲオルゲへの愛という点で、献身的な崇拜、支配に対する奉仕という女性的要素を示している。「生の改造 Umbildung ないし新生 Neubildung への衝迫」という男性的要素と、崇拜と奉仕という女性的な要素の結実によって、『年鑑』の本質は生まれてくる。「(芸術的) 創造が審美的問題 ein ästhetisches Problem ではなくて宇宙的問題 ein kosmisches Problem」であったとされるダンテ、シェイクスピア、ゲーテの響みに倣い、芸術作品が「素材 Stoff が形式 Form を通して形成物 Gestalt へと具体的に貫徹していくという象徴に倣って、形成されつつ創り変えていく形成 gestaltet umgestaltende Formung が彼らの作用の目標と

なる。古典ギリシアの芸術的で破綻のない生の感覚が彼らの輝ける理想であり、その理想に彼らは、宇宙の本質と人間の本質の新しい統合によって到達することを望む。(中略) 統合、特に素材と形式の統合、形成物 *Gestalt* が、そこから彼らが精神的な糧を汲み出す基盤である。」(S. 26) 従ってカオスへの親縁性をもつ音楽は否定され、「思想的、プロテスタント的、北方的、ロマン派的要素」は拒否される一方で、「生氣にあふれ、スピリットと感覚性に富んだ *geistsinnlich*、カトリック的、南方的、ディオニュソスの—アポロ的、古典的—彫刻の本質」が愛される。それゆえに形成的 *formend* で論理的 *logisch* で実際の対立を生き生きと統一する人物、つまりナポレオンやシーザー、アレクサンダーといった偉大なる人物は、「無形式だったりふたたび混沌とした不定形の塊に崩壊しかねない素材を形成する」として正当化され、模範とされる。「人類 *Menschheit* の権利に対する人間 *Mensch* の権利、普遍的な平等 *allgemeine Gleichheit* に対する自然な差異 *natürliche Unterschiede* の権利、概念によって区別されたもの、すなわち純粋に科学的なもの *rein Wissenschaftliche* に対する生き生きと統一されたものの権利が、こうして主張される。」(S. 27) 「それゆえに偉人は最奥の真実であり、まさに英雄と支配者のみが真実なのだ！」(ヴォルターズ、第3巻、151頁)

このように『精神運動年鑑』とゲオルゲ・クライスについて論じたうえで、ペーレントは、この講演会を主催している「ボン文学史協会」における芸術観と、ゲオルゲ・クライスにおける芸術観を対照する。「われわれの仕事に対する警告および激励として『年鑑』は有効であるに違いない。生を概念で薄弱にしてしまう危険をもち、本質を経験する代わりに安易に関係のみを追求しかねない、一面的で、純粋に科学的な精神に対する警告でそれはありえよう。偉大なものと卑小なもの、価値あるものと無に等しいものを区別し、可能性と能力に応じてわれわれがそうありたいと望んでいるように、われわれを実際にまた本当に魂の最奥部で捉え、われわれを新たに形成し、われわれにとってそれについて明確に意識的に認識することが内的な生の必要性となるような作品のみ

を研究の対象とするように、我々を激励してくれよう。」(S. 27) このようにゲオルゲ・クライスのもたらす文学研究に対する批判的な教訓を認めたうえで、ペーレントは「ボン文学史協会」における芸術観を次のように要約する。「芸術作品に対しては純粋に審美的に対処せよ！」しかしこの要請をペーレントは「ピラミッドの頂点」と呼び、頂点が頂点でありうるのは、この頂点が基盤に支えられていることを意識している場合に限られるとする。そしてその基盤、芸術における包括的な原体験に対する要請をペーレントは次のように呼び、その対論を締めくくる。「芸術作品に対しては、本質的に人間的に *wesenhaft menschlich* 対処せよ！」

ここに顕れているのは、ボン文学史協会に代表される、芸術を何よりも審美的作品とする理解と、ゲオルゲ・クライスにおける、芸術創造を人間的・宇宙的なことがらと捉える見解の相違である。ペーレントは、ベルトラムの講演においてなされたゲオルゲ・クライスの芸術への内的な沈潜、追体験を、自らの「客観的な」研究の前提とすることによって序列化し、自らの対論を正当化したように、ゲオルゲ・クライスの芸術の「人間的・宇宙的」把握を、この講演会を主催したボン文学史協会における芸術の審美的把握の基盤ないし前提とすることで、底辺と頂点という位階関係を措定し、そのことによってある種の融和、調停を図ろうとしたものと見ることができる。

しかしこの「融和策」は、主催者側からの激しい反発を呼ぶこととなる。

## 2. 討 議

ペーレントの対論に引き続き、まず「討議」の口火を切ったのは、ボン文学史協会のリッツマン会長であった。慣例に従い講演者ベルトラムへの謝辞を述べた上で、彼はベルトラムの講演への不満を皮肉を込めて次のように述べる。「氏本人が、ゲオルゲは彼にとって容易でないと語っているし、氏の話の筋道を辿るのが私たちにとっては容易でないという限りにおいて、氏はゲオルゲの弟子である。それは何よりもまず、完全に熟知しているがゆえに、このクライ

スの外にいる人々の受容器官についての観念を氏が全くもって持ち合わせていないことによる。」(S. 27 f.) ゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスの言わんとすることがベルトラム自身認めているように難解であるのと同様に、ベルトラムの講演も難解であった。その意味で、ベルトラムはゲオルゲ・クライスの一員である。ベルトラムはゲオルゲ・クライスの一員であるからして、難解とはいえ、ゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスの言わんとすることを熟知している。しかし熟知することが可能だったのは彼が、ゲオルゲ・クライスの一員として、クライス特有の受容器官を有しているからである。逆に彼は、それゆえに、そのような特殊な受容器官を有していないわれわれのような一般人には、ゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスが理解できないこと自体が理解できない。従って彼の講演はわれわれにとっては理解不能なのである。以上が大まかに、リッツマンが言わんとしたことである。

ここでは、ベルトラムが『精神運動年鑑』およびゲオルゲに対して慎重に保とうとしていた距離が無視され、ベルトラムはゲオルゲ・クライスと同一視されている。そして難解さは、受容器官の不在という、理解の不可能性へ置換され、切って捨てられる。

そして返す刀で、リッツマンはベーレントの対論も批判する。「氏は私たちと同じような感じを持ったのであろう、最初は、より冷静かつ客観的に問題に对しようとしたのであった。しかしベーレント氏も後半にはベルトラム氏と同じ軌道を辿るにいたり、『年鑑』寄稿者の再現にますます傾くようになり、私たちが期待した批判は行われずに終わった。」(S. 28) つまり、リッツマンがベーレントに期待していたのは、解説でも融和でもなく、「批判」だったのである。

「取り扱う問題の深刻さに直面して批判的考察が慎重かつ用心深く行われねばならないのは自明である。(中略) 彼らについて聞き、ひょっとすると彼らの発言の三言めには反論せざるをえないと感じさせられるにもか

かわらず、これらの問題に取り組む際のやり方全体と真剣さに敬意を感じるがゆえに、われわれは本能的に反論を呑み込んでいる。しかしそれゆえに、この夕辺のうちに『年鑑』がもたらすものに対して立場を明らかにすることが不可能なのであれば、ここで問いが立てられ、その問いに関して討論しなければならないと権威をもって決定されたと強調すべきである。そこで私は、この3巻の『年鑑』についての批判的研究を、私たち共通の次の課題として目標におき、その結果のために特別な会合を持つことを提案したい。(S. 28)

リッツマン会長の「討議」を締めくくるこの提案にもかかわらず、ボン文学史協会がこの後に『精神運動年鑑』についての批判の会が開かれたとの形跡はない。おそらくは、次のオーマンの発言に見られるような反発ゆえに、改めてそのために会がもたれることは無かったのではないかと推察される。

二人目かつ最後の討論者として発言したオーマンは、ベルトラムの講演が公刊された「ボン文学史協会通信」の第6年第1冊および第5冊の二分冊で『審美的判断の妥当性——文学批評の基礎的前提の原理について』Die Geltung des ästhetischen Urteils. Prinzipielles über die Grundvoraussetzung literarischer Kritik を1911年に公刊している。ベーレントが対論で言及した「芸術作品に対しては、純粋に審美的に対処せよ!」という要請は、オーマンがこの討議での発言において「私によって形成された純粋に審美的な態度への要請」と語っていることから、オーマンの講演および講演原稿の公刊という形でボン文学史協会の原則として定式化されたものと考えられる。従ってオーマンはベルトラムの講演で『精神運動年鑑』がこのボン文学史協会に取り上げられたこと自体を明確に拒否する。「対論発表者(注:ベーレント)は、ベルトラムの態度と意図は、これまでわれわれのプログラムに乗っていた純粋に芸術的な観察とはもはや隠しようもなく根本的に対立していると感じ、そのために私によって形成された純粋に審美的な態度への要請とはかけ離れたところに正当化を求めた。事実に

は疑いの余地がない。芸術作品と芸術家が讃えられたのではなく、われわれの精神文化の形而上的伏流が描写され、倫理的に評価されたのである。(中略) こういったものの見方は、〈芸術作品に対しては純粹に審美的に振る舞うがいい〉というわれわれの基準によっては正当化も批判もされない。というのは、そのような見方は、審美的な価値の圏外にあるからだ。」(S. 28 f.) オーマンの見解は、「文化の内部で芸術が審美的享受以外の(より高い)機能を持つ」ことを指摘した R. ハーマンや E. ウティッツにより批判されていることをオーマン自身が認めている。しかし「審美的要請はそもそも芸術作品から人間に掲げられた最高の要請なのだろうかという問いを意識的に控え」つつ、オーマンは審美的価値と倫理的価値を峻別し、文学研究に携わる彼とその協会の使命が審美的価値の判断側にあり、ゲオルゲの使命とは異なることを宣言する。「私はシュテファン・ゲオルゲがわれわれにもたらしてくれる最高の使命とは、倫理的な使命であると信じている。」従ってゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスが、「芸術の宇宙的意味」*die kosmische Bedeutung der Kunst* と呼ぶことがらについての考察は、オーマンによればボン文学史協会の関心の埒外にある。「私は、われわれのグループがその告知や決断のために使命を授かったとは思わない」とオーマンは結語し、協会会長のリッツマンが提案した、ゲオルゲ・クライスの批判的検討のための集会の開催そのものを拒否したのである。

## V. 結 び に

この講演でベルトラムは、ゲオルゲが「否定ではなく制作によって」時代と戦ってきた点で、当時の時代批判と一線を画していることをまず確認する。ベルトラムの見るところでは、『第七輪』以降のゲオルゲの作品は、審美的芸術作品というよりはむしろ教育のための二次的媒体となった。教育者・指導者としてのゲオルゲのもとで、ゲオルゲ・クライスは『精神運動年鑑』を通して、ゲオルゲの詩が包含している思想的端緒を、評論という形で明確化し、教育的影響を強化しようとする。そこでの問題はもはや、詩そのものの審美的解釈で

はない。革新への希望は、「偉大なる人間」を根本的に体験することによって自らを形成し変容することに託される。しかしそこには、「偉大なる人間」への宗教的崇拝が、個人崇拝へと墮する危険性がともなう。ベルトラムは「聖なる炎の護り手」というゲオルゲの自己了解に、神聖なるものの媒体、預言者としての詩人像を見出し、芸術家本人への崇拝を求める倨傲とは無縁な、「流行に乗った平板な半熱狂の殺到に対する彫琢された拒絶」と孤独を認める。ここにベルトラムは指導者願望と、個人崇拝の忌避との矛盾の解決を求めようとする。最後にベルトラムは、ゲオルゲの辺縁性を認めつつも、国境の内なる者への告知者、護衛者、革新者は常に境界線にいた、という主張をもとに、ゲオルゲをドイツへ回収し、ナショナリスティックな願望を負わせる。そして詩句の秘密に聴き入ることに希望を求めつつ、しかし体験によらず言葉によってその秘密を説明することはできないとの断念を表明して講演を終えている。

ベルトラムがゲオルゲ・クライスの内実に迫ろうとしながら、同時にゲオルゲ・クライス対して一定の距離を保とうとしていることは、対論者のベーレントおよび主催者側のリッツマンとオーマンからは認識されなかった。彼らにとってベルトラムはあくまでもゲオルゲ・クライスの一員であり、その講演はゲオルゲ・クライスの言説への沈潜とその共体験を主観的に語ったものに過ぎないとされる。リッツマンは、ベルトラムの講演の難解さを、ゲオルゲ・クライスの内向きの言説の難解さと同一視する。

リッツマンとオーマンを代表とするボン文学史協会の芸術観は、「芸術作品に対しては純粹に審美的に対処すべし」という見解に要約される。対論に立ったベーレントは、『精神運動年鑑』が芸術に求める態度は、「芸術作品に対しては、本質的に人間的に対処すべし」であるとする。しかし審美的価値と倫理的価値を峻別するオーマンにとっては、こういった芸術の見方は、審美的な価値判断の圏外にあるがゆえに、ボン文学史協会の関心の埒外にある。したがって、オーマンはゲオルゲ・クライスおよび『精神運動年鑑』の言説をこの協会のテーマとして取り上げること自体を拒否する。



ベルトラムの講演には、ゲオルゲ・クライスにシンパシーを持ったこの当時の若い教養読者層がゲオルゲ・クライスに見出した関心のありかを読み取ることができよう。指導者願望と個人崇拜への拒否のあいだでベルトラムは揺れており、一応の解決を見出そうとしているが、その解決は十分に説得的であるとはいえないだろう。問題なのは、彼が最後に試みた、ゲオルゲのドイツへのナショナリストチックな回収である。この方向性は、その後も変わることなく、1933年のナチスによる政権奪取後のゲオルゲに関する記念講演、「ドイツ古典の可能性」<sup>12)</sup>にまでつながっていく。

また、リッツマンとオーマンの「討論」には、当時の大学における文学研究者がゲオルゲ・クライスについて抱いた反感と拒絶を如実に見ることができるところには芸術を審美的に見るか、倫理的な問題として取り扱うかという根本的な対立がある。『芸術草紙』第1冊(1892)でゲオルゲは、芸術を社会的関心のもとに取り扱うことを峻拒した<sup>13)</sup>。そのゲオルゲに率いられる『精神運動年鑑』が20年後に、芸術を審美的ではなく倫理的問題として扱っているという理由で、当時のゲルマニスティックの主流から排除されたことを、単に皮肉な事態と片付けるわけにはいくまい。ここには、ゲオルゲの芸術観の一貫性と歴史的展開の問題が一方にあり、他方ではゲオルゲ・クライスと当時のゲル

12) 「ボン大学にて1933年7月ゲオルゲの最後の誕生日を祝せる際の講演」という副題が付されている。そこにはたとえば次のような一節がある。「われわれは、人本主義者が、〈明るき髪を毛したるものの清められた血〉に対するゲオルゲの深い感動をこもった讃美を嘲り、今もなほドイツ民族性のうちにある〈心憎れる隣人共を凌いで王侯の位につけるもの、すなはち血の中にある非常に古く尽きせぬ遺産〉に対するゲオルゲの高貴な意識を嘲る言葉を聞いた。」(ベルトラム『獨逸的形姿』外村完二訳、白水社、1942年、448頁) 1912年のこの『精神運動年鑑』講演でも、随所に「血」への言及があることに留意しなければならない。

13) 「この出版物の名は既にそのあるべき姿を部分的に語っている。あらゆる国家的、社会的なるものを排除しつつ、芸術、なかならず詩と文学に仕えることである。／本誌は新しい感じ方と創作法——芸術のための芸術——に基づき精神的芸術を求める。従って誤った現実把握から生じた、あの消耗した低劣な一派とは対極に立つ。本誌はまた現在人々があらゆる新しいものの萌芽をそこに認めている世界の改良や万人の幸福といった夢には携わりえない。それは素晴らしいことではあろうが、詩とは別の領域に属している。」(『芸術草紙第1冊』、「序言と箴言」Einleitungen und Merksprüche der Blätter für die Kunst. Küpper: Düsseldorf und München 1964, S. 7.)

マニスティックの対立にとどまらない，芸術の存在とその受容と作用についての認識の差異が露呈しているのである<sup>14)</sup>。

---

14) 小論は2008年度松山大学特別研究助成の成果の一部である。